

露子と宇治十帖と 仏教思想(主に法華經)の一考察(二)

会員 久保満夫

露子と仏教思想

「恵日庵」

尼衣念ぶつながらにわがわがくこころかなしきこほろぎの家
念仏三昧に世をすね暮らしたと云は
る、石川畔の小家は、それは庵室と云ふよ
りは香をたき文をよみ人を思ふによい山
荘とこそよびたい。…仏像をもとめて持
仏堂を、閑伽水用の井戸も掘らせるなど
『石上露子集』松村緑編 中央公論新社
と、「恵日庵」では、念仏三昧に仏像を求
めて、持仏堂を閑伽用の井戸を掘らせるな
どの構想があったと考える。

露子は、好んで鈍色の衣を着ている。正平
との恋が結ばれず、尼衣を着て、念仏を唱え
ている尼僧のようなものと詠んでいる。



「恵日庵」平面想像図
(平成12年小板橋第四号より)

なつかしの京の鐘の音、上賀茂のほとりちかく、のちは銀閣寺の
畔、せうらぎのひびきにまぎらひてきくにし大谷の中の谷、代々の
みはかのまへに日ごとの様にお父様とよびかけて、今こそ流るるに
まかす涙のいくすぢ。

身もころも病みつかれて(前同)。
杉山家の墓地は、浄土宗西方寺(富田林市)にある。京の西大谷
は、露子が二人の息子の進学のときに女中一人を連れて住居を京に
移した。その時によく墓参に訪れた(親鸞の本願寺発祥の地)。
杉山家の菩提寺は、興正寺富田林別院である(真定)。後の一基は
高貴寺にある。(露子が次男好彦の三回忌に建立)。河南町平石にあ
る。好彦は、静寂な山寺、高貴寺をこよなく愛して一人で、よく来
たという。露子は、母子三人の永遠の住処に選んだ(律宗から改宗
し、真言宗)。『ひたに生きて』芝昇一遺稿集 石上露子を語る集
編より抜粋)。

昭和二十一年十二月三日、露子は女中のカヨを伴って富田林の旧宅
へ帰った。形見の家は荒れるに任せ、軒も朽ち、柱もゆがみ、物の
怪なども住みそうな家の片
すみのいろいろの灰は冷えた
ままだった。

気位の高い露子は、老女中
一人を支えに人の世の秋の
終りの虫の音の節の哀れを
聴きながら、その晩年を過ご
した(『石上露子文学アルバム』
松本和男編)。



露子歌碑(高貴寺)

露子の人生を考えると、自伝「落葉のくに」恵日庵で、親の取り
決めた結婚という悲しい気持ちと正平との結ばれぬ悲恋を思っ
て、念仏を唱えている尼のようなものと詠っている。「思ふかな宇治の

巻なるかの君に似たる宿世」と、わたしの薄幸な過去(宿世)と余
生は、「浮舟」に似ているという。
晩年の和歌で、「人の世の旅路のはて
の夕づく日あやしきまでも胸にしむか
な」と詠んでいる。わたしの人生は、旅
路の果ての夕日のあやしいまでの美し
さに惹きつけられて、心に深くしみ入
ると歌っている。波乱万丈の劇のような人
生であったが、最後まで愛執に苦悩した
露子は、ひとり超然と生きるなかに、「孤
高の人」ともいわれるように、華やかな
美しい人生のロマンを求めていたと私
は思いたい。

人生の四苦(生老病死)の苦悩の大海にあつても、愛別離苦、
怨憎会苦(怨み憎んでいる者と会う苦しみ)、求不得苦(求めても
得られない苦しみ)五盛陰苦(肉体・精神上の苦の総称の五陰が盛
んであることから起る苦しみ)など、仏教思想の四苦八苦の苦悩を
露子は短歌や美文等の文学に生かした人であると考ええる。

寺内町の地域の伝統的行事、宗教的儀礼、杉山家や河澄家等の親
戚関係による代々のお墓参りなどの生活環境の中で、育まれた露
子。彼女は、幼少期から仏教思想になじんできたと考える。また、
古典や『源氏物語』など、王朝文学に親しんでいたから、法華経思
想を知る機会があつたであろうと考える。

夢浮橋への思い

薫は、浮舟の死を知り、わが宿世の拙さを嘆いて「かかるとの筋
につけて、いみじうもの思ふべき宿世なりけり、さま異に心ざした
りし身の思ひの外に、かく、例の人にてなが
らふるを、仏なども憎しと見たまふにや、人
の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便
は、慈悲を隠して、かやうにこそはあなれ」と(蜻蛉)。自分は、男女の道につけて、ひ
どく悲しい思をしなければならぬ宿運だ
った。道心を起こさせようとして仏のなされ
る方便は、慈悲をお隠しになって、このよう
に苦しみを与えになるのであると、ただ
勤行ばかりしている薫である。また、
法の師とたづぬる道をするべにて思わぬ山に踏み惑ふかな
僧都を仏法の師と思つて山道を分けて訪ねてきたが、その山道が
あなた(浮舟)のところへ導いてくれる道となつて、わたしは思い
もかけない恋の山に踏み迷つていくという(夢浮橋)。



54帖夢浮橋(ゆめのうきはし)

浮舟は、死を決意し、匂宮の文殻を処分する。「昔は、懸想する人
のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてただにこそ、身を投ぐ
るためしもありけれ」と、昔は、懸想する思いがはずれも優劣のつ
けられないのに思い悩んで、そのことだけでさえ川に身を投げる例
もあつたと、(浮舟)万葉集の三角関係を思い出している。例えば
万葉集の真間手児名・菟原処女や桜児など、二人の男の板挟みとな
つて入水、あるいは経死した女の伝承は少なくない。浮舟は、匂宮、
薫との関係により、高貴な男性二人に板挟みとなつて不貞を犯し、
世間の笑い者になるのでは、とうてい生きてはおられないとの気
持、苦悩から、死を決意する。
人生の「はかなさ」を、思い知る浮舟は、「鐘の音の絶ゆるひび

きに音をそへてわが世尽せぬと君に伝えよ」と詠んでいる。ここに
は、あの誦経の音が消えてゆく響きにわたしの泣く音をそえて、わた
しが死んだと母に伝えてほし
い。そして、いつか、きつと
薫と逢い、夢の浮橋を渡り、
静かに手をとりあうことがで
きるようにという浮舟の想
がある。
私は、尼となつた浮舟が霧
に包まれた川もやがて晴れ
やかな空の下に出るよう
に、浮舟の宿世とのこる命、余生まで似通つていく。正平との身を
焼くような恋、夫との形ばかりの生活に苦しんだ結婚生活(愛別離
苦・怨憎会苦)。その苦しみを、美文や短歌に生かしたと考える。
②宇治十帖と仏教思想については、阿弥陀経、往生要集、大般涅槃
經からの引用もあるが、「総角」での不軽(不軽菩薩品)、「手習」
での竜女(提婆達多品)の仏教説話をはじめとする妙法蓮華經に典
拠をもつものが、圧倒的に頻度が高く、法華思想が反映されている。
作者紫式部の法華經の習熟度は高いと評価できる。
法華經でしか説かれていない竜女成仏(女人成仏)は、すべての
女性が幸福境界を確立する道を明かしていると考ええる。
③露子と仏教思想については、「恵日庵」で、念仏三昧に仏像を
求め持仏堂や閑伽水用の井戸の構想まであつた。好んで鈍色の衣を
着、自身が尼衣を着て、念仏を唱えている尼僧のようなものとい
っている。



コミック「あさゆめみし」
(大和紀著)

寺内町の伝統的行事や宗教的儀礼などを通じて、幼少期から仏教
思想になじんでいた。『源氏物語』など王朝文学などからも、法華
思想の影響があつたであろうと考える。
④宇治十帖の最後の巻の夢浮橋で、人生の「はかなさ」を思い知
る浮舟の出家後の読経が法華經といわれている。宇治十帖に関わる
人々の苦悩・恋愛・嘆きなどの心の拠り所として仏教思想・法華經
思想の影響があつたと考える。尼となつて浮舟は、夢の浮橋を渡り、
薫と逢い、手をとりあつていきたくいという想がある。霧に包まれ
た川もやがて晴れやかな空の下に出るようになり、二人は夢の浮橋を渡
つていくであろう。
浮舟と「似たる宿世」と詠んだ露子の来世は、正平とのロマンの
世界を願つていたのであろう(露子は明星派歌人であつた)。また、
人道思想や反戦思想に芽生えている短歌や美文(「みいくさ」によ
ひ誰が死ぬさびしきと髪ふく風の行方見まもる)、『兵士』など)を
読むと、平和を求めていたであろうと思われる。
おわりに
法華經寿量品第十六に、「衆生所遊樂」の一偈がある。人間は、
現世に楽しむために生まれてきたと説いている。人間は苦しむため、
宿世に泣くためにこの世の中に生まれたのではないと考える。
最後に、宮本代表より種々のご指摘賜り感謝申し上げます。
『源氏物語』で宇治十帖は、大変、仏教色が強く出ており、作者
が異なるのではと云う説の一つの根拠があると思えます。……
(テーマの)試みは、まことに壮大なものだと考えます。……
「宇治十帖」は露子の思い入れの濃い巻です」とのご指摘に深謝し
ます。大石照子氏はじめ、「石上露子を語る集」の諸兄諸姉のご
協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。